

「子達と会う」毎日学校へ

伊谷正弘さん（健福17期）

毎日のように学校へ顔を出し、子供たちやボランティア仲間（支援員）の世話をするのが楽しいという伊谷正弘さん（健福17期・ひよどり台在住）。9月5日午後、ひよどり台小学校の仲良し学級を訪ね、話を聞いた。ここでは先生3人とボランティア（支援委員）11人で男の子ばかり9人の授業を受け持っている。

この日は午後2時から保護者の参観日だった。仲良し教室で授業を受けていたのは4人。お母さんも3人が見学に来ていた。

1番手は伊谷さんの出番。昆虫を描いた紙芝居のようだ。「これは何だと思う？」伊谷さんが質問。「怪獣！」「へびや」数人の子供たちから声が飛ぶ。「違う！バツヤやけど何バツヤか分かるか」「これはトノサマバツヤやで」。「ちゃんと話を聞いててや」。子供たちと軽妙なやりとりをしながら紙芝居が進む。

次は、文房具について書かれた本を、先生が読む時間。3番目はスリーヒントクイズ。子どもたちも大いに乗って、「ハイ、ハイっ」と思い付きの答えが次々出てくる。最後は子供たちがお母さん一緒にクイズの問題を作る番だ。「誕生日に食べるものなーに？」「丸くて、中に何かが入っているものナーニ？」。子供たちは結構するどい。「パースディケーキ！」「たこ焼き！」。次々と正解が飛び出し、約40分の授業は終わった。

いつも参観に来ているというお母さんは「支援委員の方はみんな優しく、安心して見ていられます」と評



㊤ 子供たちに紙芝居を見せる伊谷さん

㊦ 仲良し学級での授業風景

判は上々のようだ。伊谷さんが担当しているのは、体育・理科・図工・音楽・算数・社会など、なんでも引き受ける。日頃、気を付けていることは、子供たちから目を離さないこと。子供たちの集中力は10分程度なので、興味をそらさないように、ケガがないように、授業中は気が抜けない。

伊谷さんが特別支援のボランティアを始めたのは約10年前。世話役の先輩が亡くなり、後を引き継いだ。先生からも「かけがえのない存在」と頼りにされている。伊谷夫人の幸子さん（健福19期）も支援委員をやっており、今年度から21期健福の井上照枝さんと23期音文の前田裕子さんが加わってくれて、少しメンバーに余裕ができたという。

伊谷さんがやっているのは学習支援だけではない。登校時の見守り、子供たちを守る会、放課後の子供たちの世話をするのびのび広場、KSCではピカピカ隊にも参加している。

幸い、健康面は自信があるので、「体力の続く限り特別支援もがんばりたいです」。とても傘寿とは思えない頼もしい言葉が返って来た。

（取材 南形徹 ・写真 芦田義和）



ボランティアの現場 6